

機関番号：47605

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520283

研究課題名（和文） ジョージ・A・バーミンガムとグレン・パタソンを中心とする
北アイルランド小説の研究研究課題名（英文） A Study of Northern Irish Fiction with Emphasis on George. A.
Birmingham and Glenn Patterson

研究代表者

八幡 雅彦 (YAHATA MASAHIKO)

別府大学短期大学部・教授

研究者番号：50166568

研究成果の概要（和文）：日本では北アイルランドの小説は演劇と詩に比べて研究されることが少ないが、ジョージ・A・バーミンガムとグレン・パタソンを中心に北アイルランド小説の研究を続け、その普遍的な意義と価値を解明した。バーミンガムの多くの作品は、深い意味を持たない軽いユーモア小説と見なされる傾向にあるが、実際には彼の深いキリスト教的寛容と博愛に基づいて、人間同士の融和に必要なものは何かを訴えかけている。一方、パタソンの小説は、北アイルランドのナショナリスト（アイルランド派）とユニオニスト（イギリス派）の対立というローカルな問題を描く一方で、北アイルランドの持つコズモポリタンの普遍性を示しているということを実証した。

研究成果の概要（英文）：In Japan studies of Northern Irish fiction are much less popular than those of Northern Irish poetry and drama. I have studied Northern Irish fiction including George A. Birmingham and Glenn Patterson and revealed its universal significance and value. Though Birmingham's comical novels tend to be regarded as shallow and meaningless, the fact is that they show with deep Christian liberalism and love what is necessary to bring about reconciliation between human beings. While describing the local problem of conflicts between Nationalists and Unionists, Patterson's novels represent cosmopolitan characters of Northern Ireland.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：アイルランド文学

科研費の分科・細目：文学 ・ 英米・英語圏文学

キーワード：融和、普遍性、ナショナリズム、ユニオニズム、ユーモア、キリスト教

1. 研究開始当初の背景

北アイルランドでは400年以上にわたって、アイルランド統一を主張するナショナリストと、イギリス残留を主張するユニオニストの間で紛争が続いている。当研究者は、北アイルランドの小説家たちはこの問題をどのように描き、どのような解決策を提示して

いるのかということに関心を抱いた。北アイルランド小説を読み進んでゆくうちにもっとも関心を覚えたのがジョージ・A・バーミンガム（1865-1950）とグレン・パタソン（1961-）であった。バーミンガムもパタソンもユニオニストの家庭に生まれながらもユニオニズムに疑問を抱き、彼らの小説を通

してユニオニズムとナショナリズムの壁を乗り越えることを模索し続けてきた。

そこで当研究者は1998年から2001年までの4年間、最初の科学研究費交付を受け、研究を続けた結果、バーミンガムの小説は世界中の人間の融和に必要なユーモアの精神を呈示していることが明らかになった。

2002年から2005年まで2度目の科学研究費の交付を受け、バーミンガムを中心に他の北アイルランド小説家たちの研究も行った。この研究を通して、パタソンはバーミンガムとは違った手法でナショナリストとユニオニストの融和を模索し、同時にこの両派の対立を超越した北アイルランドのコズモポリタン性を示していることが明らかになった。同時に、数多くの北アイルランドの小説家たちが独自の手法で北アイルランド問題を描写し融和を模索していることを学び、当研究者がこれまでに読んだうちから最も関心を覚えたバーミンガム、パタソンを初めとする7人の小説家を取り上げ、『北アイルランド小説の可能性－融和と普遍性の模索－』（2003年、溪水社）という研究書を出版した。

バーミンガムは深い信仰心を持ったキリスト教聖職者であった。彼のキリスト教信仰が彼のユーモア小説とどのように結びついているか、パタソンの小説が変貌する北アイルランドのコズモポリタン性をどのように描いているかを解明するために今回の研究に着手した。

2. 研究の目的

(1) 北アイルランド小説に関する2冊目の研究書の出版に向けて。

前述のように、日本では北アイルランド小説の研究は、詩と演劇の研究に比べてきわめて少ない。当研究の主目的は、バーミンガムとパタソンを中心に、北アイルランド小説の持つ普遍的な意義と価値を明らかにすることであった。

海外では北アイルランド小説に関するいくつかの研究書が出版されている。その先駆的なものとして、John Wilson Foster, *Forces and Themes in Ulster Fiction* (1974)がある。これは、ウィリアム・カールトン(1794-1869)を手はじめに、ジョイス・ケアリー(1888-1957)、マイケル・マクラヴァティー(1904-1992)、サム・ハンア・ベル(1909-1990)等を経て、ブライアン・ムーア(1932-2001)に至るまでの数多くの北アイルランド小説家を取り上げ、彼らの作品が持つ様々な力とテーマを縦横無尽に論じ、北アイルランド小説の意義と価値を呈示した名著である。

Laura Pelaschiar, *The Contemporary*

Novel in Northern Ireland (1998) はフォスターの著作の続編というべき研究書で、ムーアから始まり、パタソン、ディアドラ・マドゥン(1960-)、ロバート・マクリアム・ウィルソン(1964-)等を論じ、彼らの作品が北アイルランドの多様な価値観を呈示していることを力説している。

そして当研究者は、前述のように2003年に日本初の北アイルランド小説に関する研究書『北アイルランド小説の可能性－融和と普遍性の模索－』を出版し、バーミンガム、シャン・F・ブロック(1865-1935)、リン・C・ドイル(1873-1961)、バーナード・マクラヴァティー(1942-)ムーア、パタソン、ウィルソンの7人を取り上げ、彼らの小説がいかにも北アイルランド問題を描き、融和を模索し、世界に通ずる普遍的な意義と価値を持っているかを論じた。本書出版以降もパタソンを初め、デイヴィッド・パーク(1954-)、シャロン・オウエンス(1968-)といった小説家たちが、ベルファースト和平合意(1998年)を経て変貌を遂げつつある北アイルランドの地域性とコズモポリタン性を描き続けている。数年先には、これらの新しい作家たちの論述を含めて、2冊目の研究書を出版する意図を持っており、それに向けての研究を遂行する予定を立てた。

(2) バーミンガムに関する研究書の出版に向けて。

バーミンガムは当初、*The Seething Pot* (1905)や*Hyacinth* (1906)のような深刻な政治小説を書いていたが、*Spanish Gold* (1908)を機にユーモア小説に転向した。バーミンガム研究の先駆者であるR.B.D. フレンチは、初期の政治小説を指して「キリスト教道徳者の作品」と呼んだ。当研究者は、バーミンガムのキリスト教道徳は後のユーモア小説のうちにも見られるのではないかとの思いから、バーミンガムのキリスト教道徳を解明するために、彼のキリスト教に関するエッセイを読み始めた。*The Wisdom of the Desert* (1904)は、4世紀から5世紀にかけてエジプト、パレスチナの砂漠及び荒野地帯で信仰生活を実践していたキリスト教修道士たちの、神に仕える禁欲・自己犠牲精神を讃えている。*Isaiah* (1937)と*God's Iron: The Life of a Prophet Jeremiah* (1939)は、断固たる信念を持って神の意思を人民たちに伝える旧約聖書中の預言者イサヤとエレミアに関する伝記である。ナショナリストとユニオニストの融和のために、人々の利益のために、成功を信じて疑わず身を粉にして奮闘するバーミンガムのユーモア小説の主人公たちは、*The Wisdom of the Desert*のうちに登場してくる修道士たちの自己犠牲精神と、ふたりの預言者たちの断固たる信念を思い起こさ

せる。バーミンガムのその他のキリスト教に関する著作も読んで、彼のキリスト教道徳がユーモア小説のうちどのようによく反映されているかを解明することを研究目的とした。

バーミンガム研究の先駆者であるフレンチは優れた論文を残し、バーミンガムの遺族から小説原稿、書簡その他を譲り受け、トリニティ・カレッジ・ダブリン図書館に J.O. Hannay Papers として整理し、後のバーミンガム研究者のために便宜を整えた。1995年にバーミンガムに関する研究書 *The Life and Writings of James Owen Hannay (George A. Birmingham)* が出版された。これは、書誌学的価値はあるものの、作品研究としては不十分で事実誤認や誤植が多い。当研究者は、フレンチの遺志を継いで定番というべきバーミンガム研究書を出版したい。

3. 研究の方法

(1) 2007年度

8月にはアイルランドを訪れ、前述のトリニティ・カレッジ・ダブリン図書館に所蔵されてある J.O. Hannay Papers の調査研究に当たった。バーミンガムは1934年1月に、当時司祭を務めていたイギリス南部の田舎町メルズの教会の礼拝で、預言者イザヤに関する講話を行い、それがラジオを通して国中に流された。この講話を聴いた数多くの人々が勇気づけられ、バーミンガムに感謝の手紙を出した。当研究者は、保管されているこれらの手紙を読むことにより、バーミンガムのキリスト教信仰の深さを実感した。この調査研究に基づき、*Spanish Gold* (1908) と *A Sea Battle* (1948) に見られるバーミンガムのキリスト教道徳、寛容と博愛の精神について2007年度日本アイルランド協会年次大会で口頭発表し、『別府大学短期大学部紀要』第27号の中で論じた。

またこの8月のアイルランド出張の際にはバーミンガムの小説 *The Northern Iron* (1907) の舞台となったアントリム海岸を訪れ、同作品に対する理解を深めた。そしてベルファーストでグレン・パタソンに会い、彼の最新作 *The Third Party* (2007) を入手した。

(2) 2008年度

前年同様、8月にトリニティ・カレッジ・ダブリン図書館において J.O. Hannay Papers の調査研究に当たった。その後、北アイルランドに行き、クイーンズ大学ベルファースト校図書館で今は絶版となっているバーミンガムの短編集 *Minnie's Bishop* (1915) と *Love or Money* (1934) を読み、翻訳紹介すべき作品をピックアップした。ベルファーストでは再びパタソンに出会い、エッセイ集 *Once Upon a Hill* が9月に出版され

ることを聞いた。これは、プロテスタントとカトリック、異宗派同士で結婚した彼の祖母の物語を中心に紛争に翻弄されながらも力強く生き続けて来た北アイルランドの人々を描いている。紛争地域では一般市民も戦争をしていると誤解されがちだが、根本的には「普通の人々」ということを実感させる普遍的価値を持ったエッセイである。

北アイルランドに滞在中は、バーミンガムの小説 *Magilligan Strand* (1938) と *Two Scamps* (1950) の舞台を訪れ、これらの作品に対する理解を深めた。

同じく8月には放送大学大分学習センターにおいて「アイルランド文学を読む」と題してバーミンガムの作品を取り上げて2日間講義を行った。10月には、IASIL JAPAN 国際大会において“Glenn Patterson, The Third Party: Outer Conflict and Inner Calmness?” と題する口頭発表を行った。翌年2月には『別府大学短期大学部紀要』第28号にバーミンガムの短編小説「陳情団」を翻訳発表した。

(3) 2009年度

5月には日本アイルランド協会文学研究会において、「Glenn Patterson の小説と北アイルランド」と題して口頭発表を行った。また風呂本武敏(編)『アイルランド・ケルト文化を学ぶ人たちのために』(世界思想社)のうちの執筆者のひとりとして「グレン・パタソン」の章を受け持った。これらの機会を通してパタソンの小説を再読し、彼がいかに変貌を遂げる北アイルランドの姿を的確に描き、そのコズモポリタン性を呈示しているかを再認識した。また女性作家シャロン・オウエンスの *The Tea House on Mulberry Street* (2003) を読んだ。ベルファーストの街角に立つ1軒の喫茶店を訪れる人々の人生ドラマを描いた作品で、世界中どこの都市にもありそうな喫茶店の描写を通して、パタソンの小説同様、北アイルランドのコズモポリタン性を実感させるものであった。

8月にはロンドン、ダブリン、ベルファーストで調査研究を実施した。

ロンドンでは大英図書館を訪れ、バーミンガムがノーベル賞作家ジョージ・バーナード・ショウに宛てた直筆の手紙を閲覧調査した。バーミンガムは、もうひとりのノーベル賞作家ラドヤード・キプリングやゲーリック・リーグの創始者ダグラス・ハイドやシン・フェインの創始者アーサー・グリフィスらとも親交があり、改めて彼の影響力の大きさを実感した。またロンドンでは、バーミンガムが1934年から亡くなる1950年まで教区司祭として礼拝を行っていたホーリー・トリニティ教会を訪れ、礼拝に出席し、聖職者としてのバーミンガムの一端を把握した。

ダブリンでは国立アイルランド図書館でバーミンガムが別の知人たちと交わした書簡を閲覧調査した。中には小説家ジョージ・ラッセルが第一次世界大戦への志願兵を増やすためにはバーミンガムの小説を若者たちの間に広めることを政府に忠言した公文書があり、ここでもバーミンガムの重要性を認識した。また彼が1918年から1922年まで司祭を務めていたキルデア州カーナルウェイのアイルランド国教会を訪れた。

ベルファーストでは、バーミンガムの父親が教区司祭として礼拝を行っていたセント・アン大聖堂の礼拝に出席し、バーミンガム一家のキリスト教との深い関わりを認識した。その折、ベルファースト中心部の、バーミンガムの小説 *The Red Hand of Ulster* (1912)、パタソンの小説 *The International* (1999) の舞台や、ブライアン・ムーア、ロバート・マクリアム・ウィルソンの小説の舞台を訪れ、彼らの作品に対する理解を深めた。またパタソンに会い、彼の現在の仕事に関する話しを聞くと同時に、バーミンガムの小説 *The Northern Iron* の舞台のひとつであるケープヒルを案内してもらうことができた。

11月の2009年度日本アイルランド協会年次大会ではバーミンガムがイギリスの小説家グレアム・グリーンに与えた影響について、「『The Captain and the Enemy』—George A. Birmingham と Graham Greene—」と題して口頭発表を行った。翌年2月には、『別府大学短期大学部紀要』第29号でバーミンガムの短編小説「結婚式への招待」を、3月には『大分県アイルランド研究協会会報』第24号で「クリスマスプレゼント」を翻訳紹介した。

4. 研究成果

(1) バーミンガムのユーモア小説に現れたキリスト教道徳の解明。

バーミンガムのユーモア小説は、深い意味を持たない軽いものと見なされる傾向にあるが、実際には彼の深いキリスト教的寛容と博愛に基づいて、人間同士の融和に必要なものは何かを訴えかける普遍的な意義と価値を持つものであるということを解明した。

バーミンガムは1888年にウィックロウ州デルガニーで副司祭になって以来、1950年に84歳で亡くなるまで、人生の大半をキリスト教聖職者として過ごし、キリスト教に関する著作も残した。そのうちの最初の著作 *The Spirit and Origin of Christian Monasticism* (1903) のうちで、「人生が与える獲得と喜びの機会を、正直に、最大限に活用することによってこそ、プロテスタント教徒は神に対する感謝を最高に表現することができる。理想的なプロテスタントのキリスト教徒とは、勇

敢で強く、神を恐れ、神以外の何物も恐れぬ人物のことである」と述べている。また旧約聖書中の預言者イザヤに関する伝記 *Isaiah* (1937) のうちで、神の預言を断固たる信念を持って人民に伝える様をしようかしている。エルサレムがアッシリアに侵略される危機に直面した時、イザヤは人民たちに、「落ち着いていよ。恐れることはない。動じないことが強いのだ。神のみぞ恐れよ。神以外何も恐れる必要はない」と告げた。バーミンガムは、このイザヤの忠告の背後には、王も人民も持たぬ、神に対する絶対的信仰が見てとれると賞賛する。*Spanish Gold* (1908) において、ふたりの悪漢に怯むことなく、黄金を奪い返そうと獅子奮迅する J.J. メルドンを初め、バーミンガムの小説の主人公たちは、人生が与える獲得と喜びの機会を最大限に活用し、神以外は何物も恐れることなく勇敢に行動する。

またバーミンガムはイザヤに関して次のような賞賛の言葉も述べている。「厳格な、妥協を許さないピューリタニズムが存在する。賢明で、先が見通せ、十分な知識を備え、政治家としての資質を持っている。完全な絶望の時も決して怯まぬ信仰心がある。しかしそれらすべての背後には愛と優しさ、エルサレムとその人民に対する愛、そして罪ではなく罪人に対する優しさがある」

バーミンガムのユーモア小説の主人公たちは、愛と寛容の精神を備え、ナショナリストとユニオニスト、カトリックとプロテスタント、そしてすべての人々の融和のために、たとえどんな絶望の時にあっても怯まぬ信念を持って行動する。

Spanish Gold から40年の月日を経て、J.J. メルドンとケント元陸軍少佐は *A Sea Battle* (1948) において再びアイルランド西部の離れ小島に悪漢を退治するために旅立つ。バーミンガムのキリスト教道徳はこの悪漢たちの取り扱いのうちに現れている。メルドンとケントは、*Spanish Gold* におけると同様、どんなにひどい目に遭わされても仕返しをすることなく悪漢たちを釈放し、彼らが二度と島に近寄れないよう見届ける。これは、バーミンガムが *The Wisdom of the Desert* (1904) の中で賞賛している「悪に対して善で報いる」「罪人に対する慈愛」というキリスト教道徳を具現している。この小説におけるもうひとつのキリスト教道徳は、メルドンとケントの40年経っても変わらぬ友情である。メルドンは自由奔放で楽天的なアイルランド人で、ナショナリズム、ユニオニズムどちらにも与しない。一方のメルドンは保守的で堅物のイギリス人気質を備えており、頑迷なユニオニストである。このふたりが、「人間はえてして違う性質の人間に惹かれるものだ」という諺通り、お互い惹かれあって、

アイルランドとイギリスの対立を乗り越えて友情を保ち続けて来た。ふたりとも、「愛と優しさ」を兼ね備えたキリスト教徒といえよう。

(2) パタソンの小説が併せ持つ地域性とコズモポリタン性の解明。

パタソンは過去に出版した7つの小説のうちで、北アイルランドを様々な視点から描き、北アイルランドの変貌を的確に示すと同時に、ナショナリズム、ユニオニズムに囚われない新たなアイデンティティーを模索し続けてきた。このことはふたつのノンフィクション *Lapsed Protestant* (2006) と *Once Upon a Hill* (2008) からもうかがえる。

デビュー作 *Burning Your Own* (1988) は1969年の北アイルランド紛争勃発直後のベルファーストの新興住宅地に住むプロテスタントとカトリックの少年の悲劇に至る友情を描いた。この紛争の悲惨な実態を描き出し、バーナード・マクラヴァティーの *Cal* (1984) に匹敵する名作といえる。

2作目の *Fat Lad* (1992) は様々なメタファーを効果的に用いて北アイルランドのアイデンティティーを模索した。主人公ドリュー・リンダンのイギリス、南北アイルランドを巡る彷徨はさまよえる北アイルランドのメタファー、エネルギーに満ち溢れた彼の恋人ケイ・モリスは紛争を乗り越えてコズモポリタンの発展を遂げるベルファーストのメタファーといえよう。

3作目の *Black Night at Big Thunder Mountain* (1995) は北アイルランドのアイデンティティーを国際的な視野から模索した画期的な作品である。北アイルランド人建設労働者レイモンド・ブラック、ドイツ人料理人イルス・クレイン、アメリカ人青年サムを主人公にパリ郊外に建設中のディズニーランドを舞台に繰り広げられる“tragicomedy”で、3人がここにやって来たのは、因習に囚われぬ新たなアイデンティティーと理想の追求のためであった。レイモンドにとってディズニーランドは、ナショナリストとユニオニストの対立が続く北アイルランドが見習うべき、あらゆるイデオロギーの共存を可能にする理想的都市国家といえるべきものであった。

4作目の *The International* (1999) は、北アイルランド紛争勃発以前の1967年1月、かつてベルファーストに実在したホテルを舞台に、ここで繰り広げられる人間ドラマを描いた。ドラマの主人公たちは悲哀に満ちた人生を送りながらも、「明日はきっと良くなる」と信じていた。しかし彼らの夢は直後に起きた紛争で引き裂かれてしまう。

5作目の *Number 5* (2003) は、ベルファーストのある通りに立つ1軒家に1950年代か

ら21世紀初頭まで住んだ5つの家族の物語を通して、ベルファーストが牧歌的な町から紛争都市へ、そして多民族都市から現代都市へと変貌してゆく様を描いた。

6作目の *That Which Was* (2004) は、プロテスタントの牧師と彼の元に救いを求めてやって来たひとりの男性の物語を通して、ベルファーストと平和合意(1998)後も残る紛争の傷跡と未来への希望を描いた。

7作目の *The Third Party* (2007) は、パタソン自身の来日の体験をもとに、広島を訪れた北アイルランドのビジネスマンと小説家の葛藤を描いた、北アイルランドのコズモポリタン性を強く訴える作品である。

(3) バーミンガムとパタソンの共通点、ヒューマニズムの解明。

バーミンガムとパタソンの研究を続けてきてふたりの共通点に気づいた。ともに北アイルランド問題の根深さを的確に呈示すると同時に、ナショナリストとユニオニストの融和を心から願いヒューマニズムを込めて描いていることである。当研究者は、パタソにバーミンガムの話しをしたところ関心を示し、*The Northern Iron* を読み強く惹かれ、現在は1798年蜂起を題材にした小説を執筆中という。

(4) 得られた成果の国内外におけるインパクト、今後の展望。

以上、バーミンガム及びパタソンに関する研究の成果の発表は『別府大学短期大学部紀要』、『大分県アイルランド協会会報』誌上での論文・翻訳発表、日本アイルランド協会、IASIL JAPAN 学会での口頭発表、放送大学での面接授業等を通して行ってきた。国内におけるインパクトとしては、アイルランド文学研究者たちの間にこのふたりの小説家の価値と意義を広めたこと、一般の間では当研究者を通してこのふたりの作品に接する機会があった人々にはその魅力に気づいてもらえたことである。国外におけるインパクトとしてはパタソンがバーミンガムの影響を受けて小説を書き始めたこと、そしてバーミンガムに関して当研究者が英語で書いた論文に対する国外からのアクセスが100件以上あったことである。

今後の展望としては、バーミンガムの小説とキリスト教道徳の関わり、彼がW.B. イエイツを初めとする他の作家たちに及ぼした影響等をさらに深く解明すること、そして研究書を出版することにより、バーミンガムの重要性は今以上に認識されるものと期待している。パタソンに関しては、これから先出版する小説も含めて研究を続け、そして実際に会って話しを聞くことにより、さらに意義と価値を国内外に伝えてゆく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

(1) 八幡雅彦「ジョージ・A・バーミンガム『クリスマスプレゼント』」(『大分県アイランド研究協会会報』第24号、pp.15-19、2010年3月、査読無)

(2) 八幡雅彦「ジョージ・A・バーミンガムの短編小説『結婚式への招待』」(『別府大学短期大学部紀要』第29号、pp.113-121、2010年2月、査読無)

(3) 八幡雅彦「ジョージ・A・バーミンガムの短編小説『陳情団』」(『別府大学短期大学部紀要』第28号、pp.81-90、2009年2月、査読無)

(4) 八幡雅彦「グレン・パタソンの小説と北アイランド」(『大分県アイランド研究協会会報』第22号、pp.11-14、2008年12月、査読無)

(5) Masahiko Yahata, “George A. Birmingham, *Spanish Gold* (1908) and *A Sea Battle* (1948): What the Adventures of J.J. Meldon and Major Kent Mean” (『別府大学短期大学部紀要』第27号、pp.29-36、2008年2月、査読無)

[学会発表] (計5件)

(1) 八幡雅彦「“The Captain and the Enemy” – George A. Birmingham と Graham Greene –」(日本アイランド協会 2009年度研究年次大会、帝塚山大学、2009年11月29日)

(2) 八幡雅彦「Glenn Patterson の小説と北アイランド」(日本アイランド協会文学研究会、立教大学、2009年5月9日)

(3) Masahiko Yahata, “Glenn Patterson, *The Third Party*: Outer Calmness and Inner Conflict?” (2008年度 IASIL JAPAN 国際大会、学習院大学、2008年10月12日)

(4) 八幡雅彦「George A. Birmingham のユーモア小説とキリスト教観 – *Spanish Gold* (1908) から *A Sea Battle* (1948) へ –」(日本アイランド協会 2007年度研究年次大会、学習院大学、2007年11月18日)

(5) 八幡雅彦「小説家ジョージ・A・バーミンガムと北アイランド」(山陰日本アイ

ランド協会主催ジャパン-アイランドフレンドシップ in 松江、松江市民会館、2007年9月9日)

[図書] (計2件)

(1) 風呂本武敏 (編)『アイランド・ケルト文化を学ぶ人たちのために』(世界思想社、2009年5月)のうちの八幡雅彦「グレン・パタソン」、pp.319-326.

(2) 八幡雅彦『小説家ジョージ・A・バーミンガムの生涯と作品 – 平成20年度放送大学面接授業用テキスト –』(クリエイツ、2008年8月、23ページ)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

八幡 雅彦 (YAHATA MASAHIKO)

別府大学短期大学部・教授

研究者番号：50166568

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし